

昭和五十四年七月二十三日 第三行
 (種郵便物認可)
 毎月一回・十五日発行

(通第三四六号)

慈

光

第三十卷

第四号

次 ④
 63829

易往にして無人……………	近角常観……………	①
聖徳太子讚仰……………	福島政雄……………	⑥
—特に折伏と摂受について—		
歎異抄のすすめ……………	田村実造……………	⑨
一 道会 の 記……………	榊原徳草……………	⑪
念仏詩抄……………	木村無相……………	⑧①
共に悲しみ共に喜ぶ心……………	花田正夫……………	②①

易往にして無人

近角常觀

『易往而無人（いおうにむにん）』とは御承知の様に、大無量壽経にあって、一応の意味は分り易いお言葉である。即ち弥陀の浄土には行き易くして、しかも実際としては往く人が少いの意味である。しかし一寸考えると、行き易ければ多い筈なのに、それが少いのことだから、意味が甚だとりにくいのである。

併し私はこの頃もこの言葉を味うのに、親鸞聖人のこれの解釈を伺うと、いかにも意味深いお言葉と思うので、少しこれについて述べたいと思うのであるが、……。

即ちこの言葉には、聖人自らこれが解釈をせられたものがある、その直き／＼のお示しで頂くと、それがあきらかにさせて頂けるのである。

全体この一句だけでなく、大経下巻にはこの前後に若干の言葉があって、聖人はこの一連の言葉を深く味わわれたものと見え、聖人の名号なり、肖像なりの上に、常にその一つにこの文をお書きになっている。それは、或は十八願文とか、其仏本願力の文とか、それらがきまってお挙げに

極楽往生とむつかしきことに言うが、極楽に往くはむつかしいことでない。然し若い人々には、極楽に往くとは何うか、という疑いが生じ、その極楽とは何処に在るか、どうして往くのか、等と考えると甚だたやすく了解されぬことになって、易いと云われても、そう思えなくなるのであるが、――

今ここにある様に「本願力に乗ずれば、本願の実報土に生るること疑いなければ、行き易しとなり」――私共、こゝは、浄土とは如何、往生とは如何の詮索のことでない。仏の恵みの本願力で往かせて貰う故に、往く事は易いのである。東京に居て西洋の地理や方角を確かめて西洋に行くのなら易くはないけれど、船に乗れば船の力でひとりで行かせられてしまふと同じである。更に適切に言えば、こゝは往生極楽の筋道などを詮索することで行けることではなくて、仏の恵み、本願力に疑いがなくなれば、往生はひとりで定まるのである。

なおもつと云えば、浄土門はもとより往生浄土が肝腎である。往生浄土を骨子とする教であるけれども、安心のしどころは、仏の恵み、お慈悲ということが明かになれば往生はおのずから疑いがないことになってしまうのである。仏の恵みにさえ疑いが無くなれば、自然にその本願力に牽かれて、ひとりで行かされてしまふから實に行き易いので

なっている中に、いつもこの文がまた決ってお引きになっているのである。それは彼の名高い文

必ず超絶して、去りて安養國に往生することを得、横に五惡趣を蔽（き）り、惡趣自然に閉ず。道にのぼるに窮極なし。行き易くして人無し。其國逆違せず、自然の牽（ひ）くところなり。

で、これを深く頂いて行けば、信仰問題として実に極りのない味わいがある。そこで、この文全体について述べようと思う。然しまず中心とする、易往而無人から申して行こうと思うのである。

聖人の易往而無人釈

尊号真像銘文にその解釈があるが、まず今の一句だけを拝読すれば、

易往而無人というは、易往とはゆきやすしとなり――まるで子供に言うように、御親切になされてある

――本願力に乗ずれば、本願の実報土にむまると、うたがいはなければ、ゆきやすしとなり。

ある。

それは往生浄土と云っても、明らかに眼の前に仏の姿を見るようになり、死後の世界が現前するようになるならば、それは容易なことでない。彼の源信僧都などは日本において往生浄土を著しく言われた人で、先日博物館に出ている同僧都の筆になるといふ、高野山の来迎仏絵図の如き私も拝見したが、実に目も鮮かなまのあたり浄土の光景に接する様なものであった。そこで往生浄土と云えば、まず一般に、そのようにこの世ながら浄土の光景に面接する様な、清らかな思いに入ることのように思い勝ちである。

ところが親鸞聖人は、往生はそのようなことでは仰せられていない。仏の願力に救われるのが往生浄土である。願力に救われるのだから、本願の実報土に往生することに疑いが無いから、行き易いと仰せられているのである。

さて無人の方はどうかというに、

無人というは、ひとなしという。ひとなしというは、眞実信心の人はありがたきゆえに、實報土にうまるとことまれなりとなり。

一見矛盾のようであるが、かく本願力の故に浄土には行き易いが、その本願力を信する眞の信仰を得ることが甚だ難しいと仰せられているのである。――マア忍びにしてえ

らい難関がきた。今いう様に、浄土には甚だ行き易い、願力の船に乗る故に。けれども聞きなれた人は「はたして参れるか、まいれまいか」と心配し、又青年は「はたして未来というものがあや否や」かく疑ってくれば、甚だむつかしいことになるが、そういう話ではない。仏願力に夜が明ければひとりで往かせられるから、往くことは至って易い。それは西洋の里程を調べて行くのなら行き難いが、船に乗れば自から行かせて貰えるのである。それなら残らずみんなが往けるかというに、「眞実信心の人はありがたし故に、実報土に生るる人稀れなり」となり「この信ずる一段になると決して易いとはない。マア易い易いといわれていて、俄に入口でむつかしくされてしまった形で、今までの易かったのが詮ない有様であるが、聖人はかく「眞実信心を得る者稀れなり」と、いよいよ往く者に至っては甚だ乏しいと言われているのである。

「日出でて夜あくるものなり」

さて聖人の教行信証の化身土巻に、

大信心海は甚だもって入り難し、仏力より発起するが故に、眞実の榮邦甚だもって行き易し、願力によって即ち生ずるが故に。

大信心海には甚だ入りがたい、仏力によるのであって、自分の力では如何にしても信心は起らぬ。

上人のたまわく、しからざるなり。日出でてまさに夜あくるものなり。

聞いてみればその通りである。信仰を得ることのむつかしいというのは、我々の心に信心の夜が明けると、仏日の日輪は拝まれるのだと思うからであるが、信心の夜が明けるのは仏の力、仏日の日光が我々の心に射しこんで来て下されるから夜が明けるのである。即ち我々の無明黒闇を見捨てない仏心が、無明黒闇の我々の心にはじめて届いて下された時が信心ゆえ、それを云うためにわざわざこういう問を起こされてお示し下されておるのである。

ところが、こういう風に聞かれると、それは夜があけて日が出ると、一寸答えたくなると同様に、大抵は、「この信心さえ起せたら」「もう少し喜べたら」「有難くなったら」と、大抵が心の夜が明けさえすれば、仏日の日光は拝まれるという思惑を持っているのである。それはどんなに闇を明るくしようと思っても、闇が闇を明るくすることは出来ない。たまたまローソクをつけても、その火は勿ち消えてしまふと同様に、我々が主観において、或は喜ぶのだとか、念仏称えるのだとか、または仏の恵みを心に描いてなだらかに暮すのであるとか、そういうことを何程くりかえしても皆ひとときで、勿ち皆消失してしまうのである。

いよいよ本当に夜が明け渡るのに、日輪が出れば夜は全

こう云うと益々信心がむつかしいものにしてしまふようだけれど、すでに分って居られる人には、その分った自分の経験で味わって頂き、又分らぬ人はいよいよむつかしく得がたいと思われるかもしれないが、その得にくいのは、我々が自分の力で起そうとするから得にくいのである。「仏力より発起するが故に」で、仏よりいえば、仏の力が加われば信心は直ちに得られるのである。ここはきわどい処である。他力故、他の仏の力さえ加わり来れば、信心はむつかしいことはない。他の仏の力さえ届いて下されば、その届いて下された時が、もう信心なのである。

——そこで大信心海には容易に入り難い、それはこのように仏力によって発起するのであって、仏力をこうむらねば開発することはないのである故に。言いかえると絶対に私ごとではいかぬのである。

三

口伝鈔に、或時聖人弟子に対して仰せられたには、

つねにひとのしるところ、夜あけて日輪は出ずや、日輪いでて夜あくるや。

時々聖人はこうした判じ物のような問いを出し、聞き慣れた者の心を刺戟するようなことを仰せられてある、これがいつも聖人の説法の口調であられたように拝察されるのである。そこで弟子が何気なく、夜が明けて日輪が出ますとお答え申上げると、

く明けはなれる。日輪が出るとどんな闇も、忽ち一度に明るくされてしまうのである。このことは執持抄にも云われている。そこでこのように自分で起こすことの出来る信心で無いから、信心は全く仏力の現われに外ならぬのである。

親よりの伝言を聞かされる時

先日、ある信心得ようと苦しんで居る人にこの話をしたら「それではその日輪はいつ出ますか」と泣いて訴えた人があった。「こちらから努めて得られる信心なら、如何程でも苦心もしようが、先方から来ねば分らぬのなら、しようがなくて全く困る。それならその日輪はいつ来ますか」と歎き悲しんだ人があった。

そこでそういう方のためには、その夜が明けるように、その日輪をこちらからよく言うて聞かしてあげなくてはならぬ。即ちそれが「その名号を聞く」ということで、そこになるとその日輪をこちらからよく取り次いで、お聞かせするというのが一番肝要になってくるのである。

それは故郷の親を皆様が東京に居て、親はかくかく自分の事を思うていて下さると、何程皆様が想像で思われても、それは結局想像で、そう自分の心に絵をかいいて居るだけのものだから、そういうものなら忽ちあと戻りがし消え去ってしまうのである。ところが一枚の葉書、電報、

或は故郷から来る人に托しての一言の伝言にしても、親はかくかく思うているから、直き直き子供に会って伝えてくれ、とあったなら、それを聞かされた時が、はじめて親の思召しを聞かされた一念で、「如何にも親の思召しは分りました」と、一辺に親の思召しの程がうけとれるのである。故に信仰はこちらから仏のお心を想像し、考察して喜んだり、有難く思うことはない。面のあたり親の心のありのままを言うて聞かされ、取り次がれるが故に、それを聞かされると「その名号を聞きて信心歡喜せん」で、云うて聞かされるから分かるのである。

故に、他方においては、言うて聞かされる恵みの御趣意を聞くということが、最も肝腎となつていゝのである。ところが今日ではそれが言葉慣れして、聞くといつても何か事の筋道、講釈でも聞くことのようになつて居るのであるが、そうではない。かく苦惱の旧里に迷うて居るのに対し親よりやるせない憐愍を加えて下さる、その親よりの直き直きの勅命を聞くのである。

故に他力の教は、この苦惱に夜のあけようのない人生にとつて、極めて著しいことになつてくるのである。故に平素、本願名号といわれてもさほどにも思つていないけれども、この様に著しいことが人生に起つてくる、その根本の親心が本願名号ということで、これを外から聞かされると

聖徳太子讚仰

——特に折伏と撰受について——

太子は非常に憐みの心が深く、「もし狐独、幽繫、疾病、種々の厄難、困苦の衆生を見ては、終にしほらくも捨てず」と勝鬘經の十大受にある所などは、太子のお心にびつたりと来たに相違ないのであります。殊に十大受の中の第九にあります所の折伏（しやくぶく）撰受（しようじゆ）という様な問題は、深く太子御自身の問題になつたに違ひない。悪い者があれば何処何処までも叩きこらして行くと言うのが折伏で、その半面においてこれを撰受する、即ちその悪い者を胸の中におさめ入れる、そして悪人の悪というのが溶けてしまつて胸の中におさまつてしまふ。かういう所は太子の御心に大いに触れたに違ひないのであります。

この折伏と撰受について太子の註は、

「我れ力を得ん時とは、力に二種あり、一には勢力、二には道力なり。彼々の処において、とは、もし善を行ぜ

か、伝えられることがなければ信心は起らぬ。これを聞かされるから、初めて先方のお心の程が分り、徹し、即ち真心徹到のところは信心があらわれるのである。

そこで、このように自身で起こされる信心でないから「大信心海には甚だもつて入り難し」、「仏力より発起するが故に」で、言つて下さるところの思召しを聞くこと一つが肝腎となつてくるのである。故に仏力を加えられなければとても起りようのない信心であるが、さて一度それを聞かせられ、加えられれば「願力によつて生ず」るのであるかう「真実の樂邦には甚だもつて往き易い」と、斯ういふことになるのである。

（未完）

顯名鈔三

老苦というは、日月すみやかにゆきて、盛んなるよわいは早くすぐ。

病はとしをおいて加わり、形は日に隨つておとろ。鏡にうつる影にむかえば、知らぬ翁にあえるかと疑い。毛抜きにみてる白髪をかぞうれば、今朝は昨日より多し。

福島政雄

んずんば、即ち諸の道皆閉じて生死に流転し、六趣に遷移す。ゆえに大士は彼々の処において、皆この人を見て重悪は即ち勢力を以て折伏し、軽悪は即ち道力を以て撰受す。悪をやめて善を修せば、即ち聖化久しく住す。聖化世に住せば、即ち善来り悪去るが故に天人充滿して悪道減少す。道器すでに増せば、即ち仏の法輪はつねに転ずべきなり」

この御註の趣きを見ますと、折伏、撰受という事について原則をここにお示しになつたと思われまふ。

さて十七条憲法というものは、蘇我氏をはじめ、それからち日本国が続く限り、日本における所謂、権臣、閥族等の我儘を振舞う者に対する折伏の意味を持つのであります。しかもそれは折伏と云う姿を持たない折伏であります。

太子はむしろ十七条憲法においては、臣道の自覚を御自身の問題として開き現わしておいでになる。この場合、こ

れによって悪い者を矯(た)めて折伏しようとするのは
お考えにならなかった。

然し、日本の巨道と云うものを自然とそこに開き現わし
給うたとすれば、それは蘇我氏をはじめ我儘な権臣、閥族
には折伏という姿を持ったものよりはなお一層偉大なもの
としてひびく。そういうことは私共は始終経験すること
であります。私共としても、お前はこういう悪い所があると
叩きつけるように正面から意見せられるのは痛いことであ
ります。けれどもそれよりは向うの人が自分の心持を打ち
明けると云う態度をもって、自分自身はこういう悪い所が
あると云う調子で打ち明けて話された方が一層深刻に私共
には響くのであります。

そういう所から考えますと教育というものの要諦は教育
するといふ表面的意識を離れて、自分自らを打ち明けて行
く、そこに響く者にはひびく、こういう所が教育の要諦で
あります。とかく私共はそういうことになりかねるの
であります。この太子の十七条憲法はそういうお心持で
御制定になって居ります。そして当面の問題である所の蘇
我馬子という者に対し、太子御自身はどういう御態度であ
ったかと申しますと、あくまでこれを摂受したいという御
態度であつたのであります。

十七条憲法というものは蘇我家にとって痛いものに相違

七条憲法や三経義疏の中に太子の御精神、太子の御姿が
はつきり現われていることは勿論であります。この銘文
からは違った方面で太子の御衷心の声を直接あらわしたも
のとして、非常に親しい意味をもって私共はこのお言葉を
受取ることが出来、非常に親しく太子の魂の声を聞くとい
う気持ちで接することが出来るのであります。

世間虚仮、という世間とは、太子御自身を抜きにして一
般世間を仰せられたのではない。御自身を中心として世間
と仰せられたものであります。この場合、自分も空しきも
の、偽りのもの、仮のものであるというお心持があるので
あります。

このお言葉の意味は、自分ももう長い間、日本国のこと
を問題にし、殊に蘇我馬子と云う者が何とかならないもの
か、どうか真人間になって来ないかと思つて居つたけれど
も、どうしても馬子は立ち返つて来ない、相変らず馬子の
魂は荒んで居る、それと云うのも自身が偽の身であり、自
身の魂が空しい者であるからである。自分は一人の馬子を
すら感化することが出来ないのである。自分の立場は実に
虚仮である。その空しい自分の生命をただ仏の前に投げ出
し、その空しき生命を充実して頂く、空しくあればある
程、なお一層憐み給い、その空しき自分の生命を充実し、
自分を永遠に導き給う仏に自分の全生命を打ちあけて投げ

ありませんが、太子御自身はむしろ意識上の問題として、
馬子を摂取して行くことが出来ないものかと、これを御一
生の問題と遊ばされたように拝察するのであります。その
証拠には、晩年に太子が常にくりかえして仰せられたお言
葉の中にそれをほのかにうかがうことが出来ると思つので
あります。このお言葉は天寿国マンダラの銘文中にありま
すが「世間虚仮、唯仏是真」であります。

私共は十七条憲法とか、三経義疏とかによって太子が公
の人として御制定せられたものを拝読することが出来ます
が、この銘文においては太子がむしろ御家庭の中で始終仰
せられたお言葉を拝するのであります。これを残された橘
姫は、太子の御従兄の尾張王の御子様であります。この
方は太子の御臨終まで太子にかしずき給うたお方でありま
す。太子がおかくれになつた後において大変悲しまれ、推
古天皇にお願ひ申上げてマンダラをお作りになつた、その
願主であります。これは御血統の上から考えましても、
太子の御心持をよく純にお受取りになつた方であるまいか
と思つのであります。その銘文の中に、太子は平常から
「世間虚仮、唯仏是真」と仰言つていたとあります。

さて人間一般の心理として、公の席で堂々と申すことよ
り、自分の家庭などでフト口をもれて出る言葉にその人の
真実が現れるものであります。それで太子の場合でも、十
出す、そのみである。こう云うお心持でなからうか。こ
れは私自身の心持から拝察するだけであります。どうも
そう云うように思われるのであります。

そういうわけで、この世間虚仮、唯仏是真というお言葉
の中に太子の三十年間の限りなき苦惱というものがほのか
にあらわれている。こういう風に考えられるのでありま
す。外に太子のお言葉の中からそういう太子の魂の底から
直接注ぎ出されたお苦惱の声というものを発見することは
できない、ただこのお言葉一つであります。併しこれは御
家庭における太子のお言葉でありますだけに太子の衷心の
苦惱をそこにほのかに漏らし給うたものであります。そう
でありますから太子は馬子というものを摂受したまおうと
して、太子御自身の生命がそういう者を摂受することがで
きない。こういうことを痛感し給うたのである。それは実
際その通りであつたので、馬子は中々転向して居らないの
であります。

太子が亡きあとも馬子の横暴は続きましたが、唯扶桑略
記に、馬子の臨終の時「自分が死んだら自分が太子の御前
に跪いている絵を描いて自分の墓の前に懸けてくれ」と遺
言したとあります。これは有難いことで、太子の何んとか
して馬子を真人間にしたいというお心持が、とうとう最後
に馬子に徹し転向して死んだとなつております。

歎異抄のすすめ

田村実造

攝取不捨(第一條)

さきに、第一條は歎異抄全体のまとめにもあたるので、当初にこの条をとりあげるのには理解しにくいだろうと考へ、あとまわしにして第二條からはじめましたが、前条で「弥陀の本願」が出ましたので、第一條にかえることにしましょう。この第一條には「弥陀の本願」、「念仏」、「信心」という三つのかんじん・かなめのものが集約されていると思います。

第一條の本文は、つぎのとおりです。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏申さんと思いたつ心のおこるとき、すなわち攝取不捨の利益(りやく)にあずけしめたまうなり。

弥陀の本願には老少善悪の人をえられず。ただ信心を要とすと知るべし。そのゆえは、罪悪深重・煩惱熾盛(ほんのうしじょう)の衆生をたすけんがための願

ついに見事に誓願を成就して阿弥陀仏に成った

というのです。前条に引用した第十八條の「弥陀の五劫思推の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」とは、このことをさしたものです。法蔵菩薩が阿弥陀仏になられたということは、弥陀の誓願は単なる願ではなくて、すでに「成就した救い」であるということです。

念仏は、この成就した弥陀の救いを具体化したもの、すなわち弥陀のなまえなのです。それはちょうど母親の慈愛が具体化したものが「お母さん」であり、「お母さん」こそ子供が母親の慈愛をあらわす端的な表現であるのと同じことなのです。「お母さん」のよび名ほど、子供の心の飢えを満たしてくれるものは、ほかにないだろうと思えます。日本の兵隊さんたちが戦場や野戦病院で最後の息をひきとるとき、みな「お母さん」とさげんだとききますのも、同じだと思えます。

それゆえ、これを「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて、往生をばとぐるなり(きつと救われる)」と信じて、念仏申さんと思いつ心のおこるとき、すなわち攝取不捨の利益にあずかる(しっかりと救いとられる)といわれているのです。このことをうらがえしていえば、攝取不捨されておればこそ―成就した救いであればこそ―念仏申さんとと思いつ心もおこるのです。これを再び母親と子供に

にてまします。

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきがゆえに。悪もおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云云。

この第一條の本文には、少し註釈が必要かと思えます。「弥陀の誓願不思議」とは弥陀の本願の絶対的はたらき(絶対能力)のこと。經典では釈尊の人類救済の悲願を擬人化してつぎのように述べてあります。

阿弥陀仏(弥陀)がまだ仏(覺者)に成らない以前の法蔵菩薩(ほうぞうぼさつ)の時代に、すべての衆生を救わねばと発願し、もしもこの願いが成就しなれば、自分は成仏すまいとの誓いを立てたので、弥陀の本願を誓願ともいいます。そして「法蔵菩薩」はこの誓願を成就すために、無限に長い年月―仏教では五劫という―をかけて思索(思惟)をかさねた末、

たとえと、母の慈愛が身にしみたればこそ、子供は「お母さん」と呼ぶのであった「お母さん」とよんで始めて母親の愛情が生れてくるのではない。卵がさきか、にわとりがさきかではなく、ここではにわとりがさきなのです。そればかりではありません。「お母さん」と呼ぼうとする心、すなわち念仏申さんと思いつ心までも弥陀の本願の念力によるものなのです。これが「絶対他力の念仏」といわれる所以(ゆえん)です。

それでは、弥陀の救いには何か条件があるのか。ぜんぜんありません。弥陀の本願には老・少の年齢制限も、また善人・悪人の差別もなく、ただ弥陀の救いを信じて念仏申すだけでよいのです。しかも多くの衆生の中でも、つみとが深く、煩惱さかんなものこそをめあての本願ですから、その本願を信じて念仏申せば、これにまさる善はなく、また念仏の善にはいかなる罪悪もなら恐れる要はないのです。これは浄土門の救いは、本願他力の念仏以外には、いっさいの自力修善は必要ないことを主張して、他力念仏の絶対性を強調したものです。

一道会の記

榊原徳草

次に岡山大学の山田幸先生のお話でした。

私は岡山に居ります山田でございます。岡山は花田先生が池山先生にお目にかかった地であり、又念仏者達が池山先生の下でお育ちになった地であります。現在は何かそんな空気とは離れた環境で淋しく思っています。

私、実は丁度外国に行きまして言葉が通じないと大変不自由することがございます。言葉が通じると嬉しく思いますが、私は今、お念仏というものが通じない世界に居りますので、今日此所に集まらせて頂きますと、お念仏という言葉が通じます。そこでそういう喜びを頂こうと思つて今日馳せつけたわけでございます。そうしたお話を聴くことを楽しんで参つたのであります。

私がお話するなど用意は何もなく参つたわけで、お話しする資格の無い者ですが、一寸先き程、花田先生が仰言つたように、世間虚仮、唯仏是真ということ、私自身もつくづく感ずるのであります。と申しますのは、毎日教育だ

い生活で、仏力を負かす何ものもなく、歎異鈔の「信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし」という力強さであります。

私は自然科学をやっておりますが、世間虚仮、唯仏具真という、世間がひっくりかえつてしまふような真実、これだけは学生達にも伝えなければならぬと、こういうことを感じております。簡単でありますがこの失礼いたします

次ぎは北岡行男先生のお話であります。

私は数年振りに一道会に出席させて頂きました。先程は榊原老師の声涙共に下る歎異抄の拝読、又花田先生の誠に深刻なお意見と正当な親鸞聖人の流れをくまれた深い思想、それから発した味わい深いお言葉。又西元先生の笑みを浮かべながらの謙虚で深い味わいを承りました。

まことに一道会に参つて、池山先生の仰言つた「阿弥陀湯」と申しますか、それにとつぷりと溶させて頂いた感激でございます。

私、池山先生の御在世中、何回もお話を伺つたんですが時節到来せず、信に徹し得ませんでした。丁度五十四歳の時、二十年前であります、この一道会のこの部屋で、この御仏壇の前で、不思議に私の胸に火を灯して頂きまし

とか、研究だとかやっておりますが、さて一体これで何が残るかと言いますと、何もなくなる、池山先生が、唯念仏だけが残ると仰言つたのですが、本当にこれはもう、ただ口だけでは言えず、感じるだけでございます。

聖徳太子が、常に家庭内で、世間虚仮、唯仏是真と仰言り、また親鸞聖人が歎異抄でうかがうと、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よるずのことみなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします、と仰せられています。それは全くこの、何と申しますか、仏教の一番本質を見抜かれたことは、驚歎にあたいすることでありませう。

毎日の生活の中で云えば、私をふくめて一切の世間は真暗で、ただ念仏だけが、お念仏の光りだけが道を照らして下さるのであります。そこに「智眼くらしと悲しむな、生死大海の船筏なり」とあらわれて下さり、そこに無碍の一道、障り多い中においてさわりが碍りとならなくなり、そこを越えさせて頂けるのであります。それこそ本当の力強

た。その時、城さんの質問が御縁になって、榊原師や花田さんの適切なお導きによって長夜の夢を晴らせて頂いたようなわけなんです。

けれども先程の西元先生の仰言つたように、一生馬鹿で、馬鹿は死ななきや治らない、という私で、しかもその馬鹿を自覚しません。毎日横着者でなまけてばかり居りますして、池山先生の遺著も歎異抄もあまり拝読もせず、しかも心の底に信仰の火がともっておるような顔をしておりまして、誠に相済まぬ次第であります。

けれども、何かその情緒と申しますか、ほのかな埋火のような情感が潜んでおりました、それが時によって燦（いぶ）りながらすすすという生活をして居りますけれども、家族や、知人、或は自分の上に無常感の迫る時もありますし、そういう時、埋火が燃えまして、或は清らかな水道の水でも云うようなものが流れてくるので、お蔭をこうむっている次第でございます。何か障害に遭うたびごとに、抜き手を切つて、波をしのいでいく、いくらかそういう実感がございます。こういう一種の精神的支柱と申しますか目に見えぬ力のお蔭を被っておりますことは、この席でかつて聞かせて頂いた御恩であります。その御恩も忘れがちで申し訳のないことでもあります。

次は川畑愛義先生のお話であります。

この一道会に参ることは一年の節目に当る気がします。ああ又ここへ来たなあ、浄住寺和尚の顔が見える、又先生方や篤信の方々に会える、そう思うわけです。同時に果して来年はどうだろうか、そんな気がします。それがだんだん偽らない気持として切実な気になります。これは若い人には解らない「来年は？」ということですよ。

この会は池山先生の御徳を慕って自然発生的にできたのですが、私はこれを支えて下さると申しますが、ある意味では節目になるんじゃないかと思いますが、これは何かゆたかなと申しますか、有難い、皆さんこういう雰囲気と力、それは勿論お導きによることは申すまでもありませんが、矢張りその中で榎原さん、それから花田、松本さんをお思います。

大抵の方はご存じと思いますが、松本さんは温厚なと申しますか、綺麗なお姿がもうここに見えなくなったことが淋しく思われます。で、今から四十年前に私共は羽溪了諦先生の知四明寮に居り、松本さんも同じ寮生でした。この方は法字部を出て再び文学部で学んでいられましたが、この方が寮に居ると何か漂うような雰囲気を持っておりました。あの四十年前の松本さんは端麗な姿でした、花田さん

すと違うのです。

なぜこんなことを専門単位の所で言ったかと申しますと、今は御承知のように落ちこぼれない教育とか、新幹線教育とか云っています。然しついでにゆけない者をどうするか、主として日教組を中心として言うのですが、私は落ちこぼれない教育、落ちる者を救うということは問題があると思う。第一、人の子に対して落第するとか、落ちこぼれないとか考えてゆくことは、生徒等を集団としてとらえる立場である。一人一人を絶対的な実存として考える時には、落ちこぼれとか落第とかいうものはない。それで教師が大勢の人を同時に救う、或は抱きかかえるということではなくて、一人の生徒に対して自分が全生命をぶつけてゆく、一隅を照らせばそれでいいじゃないか、こう考えるのです。

一隅といふす、こはどこにあるかという、先ず照らすものは光りでなければならぬ。そういうものは外にはない、我身を捨てて、仏法を何処に求めようというのかと。又、天台に摩訶止観ということがあがる、これは中国の隋の時代に出来たそうですが、その中に「三界は別法なし皆これ一心の作なり。巧みな絵師の種々なる色を作るが如し」と。過・現・未また別のとり方もあるようだが、それは丁度巧みな絵師が種々の色で塗るようなものだ

はそう云っちゃ失礼ですが、どこか泥臭い所が（一同笑声）あります、この三人でこの会が出来て続いてきているのですが、皆さんの心意気でこれを永く続けて欲しいと思ってお願ひしたいと思うことです。

さて、実は私はまだ今でもある大学で専門単位を教えており、そこで試験問題を出したんです。それは「一隅を照らすものは即ち国宝なり」という有名な一句です。それをよく説明したつもりですが、答がよくできていないのです。そこでその講義を補足しようと思つて、一寸書いたものがありますのでそれを被露しましょう。

「一隅を照らすものは即ち国宝なり」とは伝教大師の話ですが、この読みかたについて近頃学者の間で異論を唱える方もあるんですが、今日、念のために比叡山延曆寺に聞いてみました。矢張りこちらは信仰の立場として、世間で言われているように「一隅を照らすものは即ち国宝なり」と読んでいるとのお答えでした。

もう一つの読み方は全く反対でして、これは元來大師の書かれた『山家学生式』の中にあるのです。そちらの読み方は「一隅にして照らすは即ち国宝なり」というので、一隅にして千里を照らすはこれ国宝なりという意味です。これも信仰上の味わいとは正反対のことも、元へもどせば同じことになるんですが、一寸違うんです。表面づらだけ押

と。青い眼鏡で見れば青く、赤い眼鏡なら赤く見える、結局は一心によって三界は決つている、別に法というものはないと。こうすると「一隅を照らす」という一隅は、まず自分自身でなければならぬと私は思うのです。で、私が教える立場でみると、そういう意味で先生が数十人の者と、全体の者とかをつかまえて、お前達はという考えでなくて、本当に一人対一人であるというような考えに立つのです。これに關しまして、これは経済界の人ですが、ピード・フィッシャーという人が「一人の人が全体のために、全体がただ一人のために」この全体が只一人のためにというの、三界が一隅を照らす、ただ一人に精神を集中する、或は生命を賭ける。特に信仰の世界、宗教の世界から言うと、ピタリしてくると私は考えております。それで保健上の場合でも、先ず全体の人をどうするといふ大それた事を考えないで、諸君は先ず誰かその中の一人の行為、或は指導が徹底出来たらそれで満足すべきでないかと思っております。

それについて、こういう事を言うとお叱りをうけるかわからないけれど、私には弟がいました、矢張り医学部の学生で、知四明寮を出まして、西元さん、宮地さん等と一緒に学道舎に入ったんです。そこで私の弟が結核になり、大学病院に入院したが、半年間だんだん悪くなるばかり。

昔は結核によい薬がなかった。そこで主治医と主任に聞くと、まあ五分五分だなあ、という。そこで私は弟へ言いました、どうも君の病気は危いようだ。どうせ死ぬなら僕の手で死ななかと。すると弟は、兄貴の手で死ぬのなら自分は満足して死ねると。そうかよく言ってくれた、それじゃ兄貴の命も君にあげようと。それで大学に就職していたのをやめて、弟に付ききりになり、弟を診て、そして半年になりましたが、弟が非常によくなりまして、奇跡的と云いますか、病院の婦長さんからまだ出られないんですかと言われる位、元氣になりました。

そういう氣持になって弟を診るようになったのは、横田慶哉先生が仏法宣布に専念して居られる姿、先生が仏道に捧げる情熱というものは本当に凄いもので、情熱の限りを尽くされる、その姿にふれて、医者もこうなければいかんなど思ったのが、私の心のどこかにあったように思います。私事ばかり申して恐縮ですが、私は六十三才で停年となり、その時、停年祝い、所謂、追出しコンパをやってきました。その席で次のような話をしました。

実は小さい時から多分医者になるだろうと両親も期待していました。それで当時結核が一番重い病気だったので、病める者、悩む者、悲しむ者を救おうと思ひ、弟と共にサナトリウムを開こうと思っていたんです。所がある日、

次に長崎の平岡担先生のお話です。

毎年十数人の者が長崎からこの一道会に参らせて頂いてお世話になっていきます。いつも、榊原先生、花田先生、西元先生、それから今の川畑先生のお話を承り、古いものは約七年か八年になります。

さてどうして長崎からというかと、これは不思議なご縁でございます。私事ですが、今も川畑先生の人生に対する非常に鋭い洞察を伺って居りますと、かつての私のほんやりした生涯の事がひしひしと想われるようでございます。

それから、西元先生の御著書と思ひますが、先生がお若い時、加茂川の畔を散策しておられ、靴の下に踏みつけられておる雑草が自分の姿であると、こういう文章があったと記憶しております。私が非常に困りました時に、今でもその文章が心に残っております。

さてここにお世話になるようになりましたのは、池山先生の無二の信友であられた近角常観先生の教えを九州でうけられた長崎の高原憲という御医者様、この先生に教えを受けました者が、現在残っております。そうしたことで、誠にとり合わせというものの妙をつくづく感じさせられるのでございます。

長崎でも高原先生の追憶会を毎年催しておりますが、昨

突然恩師の戸田教授から、臨床医よりも基礎医だ。治療より先きにやるべき予防医学が大事と言われて、じやと、その方へ進んだんです。それから停年になって、祝いの席で申しました。私は臨床医になった方がよかったのか、基礎医学に入って診療しなかったのがよかったのか自分解らない、停年になってもわからない、と。

それから十年経って今、私は臨床医にならなくてよかったのでないか、なぜかと言いますと、ともかく、一つ確かなことがある、それは誤診して人を殺さなかったこと。もし私が臨床医になっていたら何を仕出かしたかわからんと思う。

然し基礎に居ても、それでも満足だと思ふのは、一人の私の弟を治した。弟をあのまま大病院に置いたら主治医の言うように五分五分で、どうなったろうか。所が私が引き取って弟は治癒してくれました、これは勿論精神的なものと思ひますが。

そういうことで、私はすでに夕陽が沈むのが見えてきました、自分を照らす光りというものがあって、どうやら非業の死もしないだろうかな、という氣がするんです。昔ながらの乱暴奔放な話をしました、失礼しました。

年五月に榊原先生にわざわざお越しいただきお話を伺わせて頂きました。

私から何も申上げる事はございませんが、法のつながりによる人と人との間柄というものは本当に何ものにもかえ難いものがあることをしみじみ味わうことでございます。川畑先生、西元先生のお話にしましても、何かこの私の若い時に繋がるような氣がいたします。まとまりもなく心に浮かぶままを申し上げます。どうか皆様にはお身体を大切になされますように、榊原先生にはいつまでもこの会を護って頂きたいと願っております。有難うございました。

閉会のことは

(榊原)

それではこれで……。一期一会ということを此頃特に思うのですが、これも死にたくない心から出ると思ひます。

帰依という語の依とは、生きて居る時に依って生きること、帰とは、死してその仏の所へ帰るといふことであるとする書物で読みました。仲々仏様の所に帰りたいくない、いつまでも生きていたい、だから、一期一会が逆に死を思う上から出てくる。こういう仕様のない、スリーブの中でその味を知らぬスプーンのような私を思ひます。

こういう会に遭わせて頂く、不思議な催しに会う。会を

聞く方も、参集する方も、ともに如来の善巧方便の限りを
尽くされた結果であります。ありがとうございます。
今から寺で作った精進料理のお齋をいただきますので、ど
うぞお残り下さい。

右のように、夕方まで和気霽々の法浴の内に食事を終わ
って、それから夜更けるまで坐談会が続きました。そして
翌日は長崎の方々が会場のあと片付けを手伝って下さった
り坐談になったりして、夕方の列車時刻に間に合うまで談
合が続きました。

今年の一国会はこうして池山先師の御恩徳の中に無事に
終わりました。夢を通して来年の一国会にも私もこの席にあ
りたいものと思ふや切なるものがあります。

(昭和五十三年一月六日記)



念 仏 詩 抄

恐ろしや嬉しや

和上おおせに

// 弥陀の手くだに

かかりてみれば

機法のありのまま

見えるゆえ

おのずから恐ろしいやら

うれしいやら——”

(和上||禿頭誠師)

弥陀の手くだというは
智慧の念仏

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツの

鏡にうつるは

墮つる機

六字の法

不問語

清水凡禿

火を焚きつける人にはさほどにゆぶり(煙)を感じない
が、離れている人にはたまらなく煙い。一家の中に一人の
火を焚きつける人があれば家内中けむたくなる。そこに煙
出しの必要を感じる。

然し煙出しは家の中だけほけむたくないが煤が飛んで思
いがけぬ方へ渦をまく。そこで完全燃焼器が必要である。
完全燃焼器とは何か、それはほかではない仏様からいただ
いた御念仏だ。それによって自分自身の値打ちを知らして
いただくこと、それ以外には決して解決の方法はない。

吸物に味の素を入れると、塩からいままに甘みが出る。
酢のものに入れると、酢っぱいままに甘みが出る。うまみ
とは味の変ることではない。

四角なものは四角なところに持味があり、三角なものに
は三角なところに持味がある。信仰の世界にはじめてその
持ち味がでる。

木 村 無 相

恐ろしや

うれしやばかり

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

いたりどいて

和上おおせに

// 今

助かりにばかり

信じにかかるとではない

弥陀のオマコトが

いたりどいてくださるのじや——”

弥陀のオマコト

ナムアマミダブツ

いたりどいて
ナムアミダブツ
お助けというも
ナムアミダブツ
信心というも
ナムアミダブツ
み名をいただく
ほかはない

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

今のお声

和上おおせに

〃お声一つ

天地法界に

今のお声ほど

とうときはなし

助くる助くるの仰せに

まちがいはいはございませぬ〃

第一なり——〃

押し押しすると

ウロウロする

それを

このままお助けと

自分でどれだけ

おさえつけても

どうにもならぬ

聞くこと聞くこと

よき人に打ちあけて

よくよく

聞くこと聞くこと——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

何を言うても

和上おおせに

〃いくたびも

こわされ

まちがいあれば

助からぬは如来

衆生の助かりが

如来の助かり

いのちをかけた

ナムアミダブツ

助くる助くるの

今のお声

ナムアミダブツほど

とうときはなし

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

聞くこと聞くこと

和上おおせに

〃明信寺いわく

押し押しすると

ウロウロする

それなりにしておくは

大様（おおよう）の

うちたたかれ

はじしめられ

なげつけられ

風にあい

雨にあい

出来上ったものでなくては

本物ではあるまい

何を言うても

一仏の成等正覚しやもの——

もまれねば

この味の出ぬ

新茶かな——〃

何を言うても

一仏の成等正覚しやもの——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

共に悲しみ共に喜ぶ心

花田正夫

仏教では、慈悲喜捨の四無量心を説かれている。慈とは相手のすべてをよく理解して自分の胸におさめる心。悲とは相手の身になりきっていとおしむ心。喜とは、相手のよろこびをわがよろこびとする心。捨とは、度(ど)して度したの思いも持たない平等心である。菩薩方はこうした心をもって仏陀への道をたどられるのであるが、その鏡に照らされて、私共凡愚の身をうつし出され、如何にも小慈小悲もない身と知らされる。

ドイツの作家リヒテルの言葉に

「人の悲しみを悲しむことは凡人と雖も可能であるが、人の喜びを喜ぶことは天使にあらざれば不可能である」とある。日本では盲人で琴の名手の宮城道雄氏は

「人々が悲しみあう声をきくと陽の音がするが、人々が喜びあう声をきくと陰の音がする」と

と随筆に記している。そねみ、ねたむころのみちみちた私共凡夫には、人の不幸に対して、口では気の毒と云いな

がら、その語調は陽の音となり、人々の成功などを口では御同慶にたえぬと云いながら、心は反対で陰の調子の音となると、鋭い音覚をもって看破している。

期せずして、東西呼応した二人の言葉によって私自身を省みる時、自分ながらもあきれはてる浅間しさにおどろかされる。更に、私共が共に悲しむ心をツルゲネフは鋭く観察して「君は泣いた」という詩に

君は泣いた、私の不幸に

君の同情が身にしみて、私も泣いた。

だが君も、自分の不幸に泣いたのではないか、それをただ、私のうちに見ただけではないのか!

とある。リヒテルが可能と云った共に悲しむ者の凡人の心の底を徹見したものであるが、云われてみれば、これ以上にはすこしも出られない自分を云いあてられている。

こうした話を或会合でして居ると、或婦人から「リヒテ

る。

衆生の苦悩は、わが苦悩なり。

衆生の安樂は、わが安樂なり。

とも、また

如来は常に一子地に住し、一切衆生を一子のごとく愍念したまう。

と、仏典のいたるところに、同喜、同憂して下さる広大な仏心をお知らせ下さるのに、これを拜読する私共は、自分の持ち合せの不徹底な微温的な温情を尺度として、それを拡大強化したものを仏心と想像して、手造りの仏を拜んでいるが真実なるものとは似ても似つかぬものである。

真実の仏心、真実の浄土、それは相對五分五分の差別心を越えた絶対の境界で、ここを去ること十萬億仏土の彼方であり、ここらも、ことばも及ばれない世界である。それをあれこれとはからうのは、盲の象見物どころのさわぎでなく、夜空に輝く星を落とそうとして竹竿を振りまわす見戲か、河原の石を積んで天に昇ろうとする痴人の沙汰である。

ルの言葉は他人同士の間のもので、親子の場合ではない、親子は共に喜ぶことも可能である」と抗議が出た。それに對し子を持たない私としては、それを肯定も否定も出来ななかつたが、その時心に浮かんだのは、私の知人の話である。若くして夫を亡くして以来一人の男の子を苦心して育てあげ、卒業、就職、そしていざ結婚させると、今迄は母一人を頼っていた子が嫁に親しみ始めると、それは親としては当然満足すべきことであるのに、淋しくて一人ぼっちになり、共に喜べないとの事であった。してみれば、親子と子が共通の喜びの場合だけが同喜し得るので、その共通点が他人同士よりいくらか多いというだけで、五十歩百歩の差で、矢張り同喜同慶することは不可能である、飽くなき利己心に障えられるのである。

歎異抄に「今生如何にいとおし不憫と思ふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし」とあるが、これは親鸞聖人が、仏陀の大慈悲心にめぐまれて、衆生縁の間でも、小慈小悲もない身をそのまま告白されたのである。そして「しかれば念仏申すのみぞ未通りたる大慈悲心にてせうろうべき」と仰ったのは、この小慈小悲もない荒寥たる人生の闇夜に、無明長夜の燈炬となつて下さるのが智慧の念仏、南無阿彌陀仏の御真実一つのお信味であ

電波は地上到るところに流れていても、ラジオもテレビ

もないと、音も映像も現われないように、大慈大悲の仏心はすでにいたらぬ限なくみちみちていても、小慈小悲もない身にはそれを感じることが出来ないのである。
十五歳で叡山に登り、一切経を五回も読破され、あらゆる修行を励まれた法然上人が、四十三歳の時、遂に行き詰られたのである。

「経典を披覽するにその智最も愚なり。行法を修習するに、その心ひるがえってくらし。…忙々たる恨みには渡に船を失うが如し、朦々たる憂には闇に道に迷うがごとし」

上人傳記

とは、其時の苦衷を聖覚法印に語られたものである。
ここに上人は、奈良や叡山の名僧、知識をたずねられて、十悪、愚痴の身のたすけられる道を問われたのであるが誰一人として答えてくれる人は無かったのである。
自分自身で始末がつかぬとなると、他の力をたのむ外はないが、その力は相対差別をこえたものでなければならぬ。幸いに、源信僧都の往生要集を読まれて、善導大師の書を知られ、末代造悪の凡夫の生死を離れうる旨を見出し、身の毛のよだつよろこびを得られたのである。

このことは、私共の求道の上に唯一の道を開いていただいたのである。法然上人は、智慧第一とたたえられた方であつた。赤児は、泣くことと寝ることしか知らぬ、すっかり親からのおあたえでそだてられるのである。

度々申し上げるが、浅原才市翁の

わたしのところが あなたのところが

あなたのところが わたしのところが

わたしがあなたになるのじやないが

あなたがわたしになるところが

と、その消息をたたえている。智目なく、行足もない私共は、「あなたがわたしになるところが」以外にたすかる道はないのである。

聖人方も、このたすかるよすがのない身こそ自分である

と表白されて、法然上人は
「余が如き下機（極重悪人）の行法は、阿弥陀仏法藏因位のむかしかねてさだめおかるをや」

と落涙千行万行の中に、念仏門に帰入せられ、親鸞聖人はまた、

「仏かねてしるしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごときわれらがためと

しられていよいよたのもしくおぼゆるなり」

と、随喜されているのである。

ゲエテは「言葉と信仰の宗教から、ここらとおこないの宗教になる」と云っている。聖人のお言葉をなる程そうい

あり、その修行も徹底されたものであった。その点では私共の及びもつかぬ方であるが、絶対なる仏心の前には、そうした一切が力のおよばぬことであつた。無限数に対すると有限数はその多少を問はず零となるように、上人は私共と同坐して下さって、末代造悪の凡夫にかえられて、如来の選択本願の念仏をいだかれたのである。

この上人ましませばこそ、いずれの行もおよび難い親鸞聖人の信眼もひらけたのである。私共の一声の念仏もその流れは遠く、この両聖人の会見にはじまったのである。

ここに、小慈小悲もない、虚仮不実の身に、聖人方はいのちにかけて、大慈大悲のそそがれていることをおつたえ下さるのである。

一人ぼっちの孤立無援の身が、共に悲しみ共に喜んで下さる最大の知己、久遠の母親のふところにおさめとられるのである。

最後にこうした聖人がましますのに、私共の五分五分根性からくるへだてところがあつて、聖人は聖人、私は私と思ひこんでいる。そしてこんなくうたら自分の自分にはとても聖人について行けぬと、くずおれるのであるが、聖人はそうした方ではない。一般の教えは「ここままでおいで」であるが、聖人は「ここままで来て下さる方」である。生れおち

うことかと信じる状態から、やがてその仰せがわが身のためであつたと心にしみとおると共に、行いとなつてあらわれるというのであるが、聖人のこのお言葉がそのまま私共のことばと転じ、私の言葉がそのまま聖人の言葉となる日を聖人方は待ちにまっていたいただいでいるのである。

一人居てよろこばば二人とおもうべし

二人いてよろこばば三人とおもうべし

その一人は親鸞なり。

とは、聖人に手をとられて、はぐれる心配のいらぬ浄土への旅の風景である。

安心決定鈔、末。

薪に火をつけつれば離ることなし。薪は行者のところに響う。火は弥陀の撰取不捨の光明にたとふるなり。

心光に照護せられたてまつりぬれば、わがごころを離れたる仏心もなく、仏心を離れたるわがごころをもなきものなり。これを南無阿弥陀仏とは名づけたり。

あとがき

花の四月がまいました。誕生仏の前に花祭りの歌が合唱せられる風光はほほえましい限りであります。私共は目先の問題にかかりはてて、人生の真目的をも見つけ得ないでいる身に、真実の願いを成就して下さった仏陀の誕生の祝いは、そのまま私共のよろこびであります。

誌友の一人が「本山に参詣して、御影堂の廊下を雑布かけて涙ぐみましたが、反省して見ると今生の過ぎたことを感謝しているが、後生の助かることに感謝の念が薄いのに気付き、歎異抄の『よろこばず、浄土の恋いしからぬ』身と慚愧せられる聖人のお言葉が身にしました」とたよりを下さいました。生死を越える道は唯一人仏陀の御手に開いて下さることありますが、これを軽視して花に浮かれる身を謝すばかりであります。

「易往無人」の近角先生の稿は、自分の慰いにかかりはてて、他の声、仏陀の仰せを聞きもらすことへの詳細なお導きを頂きました。福島先生は信の上に立たれての教育の道を生涯かけて歩まれましたが、聖徳太子の

折伏と撰受の心を掲げて下さっています。

田村さんの歎異抄のすすめは「撰取不捨」の仏心のお味わいでありませう。世間にはよいと見ると手をさしのべますが、反対の時は捨ててかえりみません。仏ひとり不捨のついた撰取で、これあってか、信に退転のしようのない身の喜びをいただけるのであります。

「一道会の記」は、岡山の山田さん、京都の川畑さん、奈良の北岡さん、そして長崎の平岡さんのことばを、榊原さんの記録から頂きました。厚く御礼を申し上げます。

木村さんも順調を喜んでいましたが、三月下旬に遠来の見舞客と談合されて無理となり、狭心症発作を五回も繰返された由、主治医から「面談十分」の警告をうけ、退院も三ヶ月延期の由であります。御見舞下さる方はどうか以上の点をお含み下さいませうにお願い申し上げます。

「歎異抄」わが身説記 花田正夫著
発行所 東京都千代田区一番町九
柏樹社

振替、東京〇一三三七二四番
三月号で振替番号を間違ひ訂正します。

△御案内▽

○ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半
一道会例会。南区駈上町二、花田宅。
市バス新郊通り一丁目下車。
東入る三筋目、左入る。

○ 地下鉄、新瑞橋下車。名鉄、呼続下車。
毎月二十四日、午前午後。

○ 昭和区小椋町、教西寺、法話会。
市バス、御器所通り、又は北山下下車。
地下鉄、御器所通り下車。

○ 毎月七日、午后。(日曜は変更)
尾西市三条板倉、蓮光寺、修道会。

○ 名鉄、新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価	半年 七〇〇円(送共)
	一年 一四〇〇円(送共)
編集・発行人	花田正夫
印刷	愛知県西加茂郡三好町大字福谷
刷人	坂部光雄
發行所	名古屋市南区駈上町二ノ八八
	慈光社
發行所	振替口座 名古屋 一〇四七〇番
	郵便番号 四五七